
真夏のこたつ

逢坂十七年蝉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夏のこたつ

【Nコード】

N4331V

【作者名】

逢坂十七年蝉

【あらすじ】

城南大学新聞同好会では夏になると“怪談酒”がはじまる。

暑い夜に酒を飲みながらの怪談も、中々乙なものだ。

今日もまた、一杯引っかけながらの怪談がはじまる。

「……『真夏のこたつ』って話、知ってる？」

酒の入った大宮葵はいつものように怪談を始めた。

片膝を立てて水晶碗すいしょうわんに入った麦焼酎を舐めながらの語り口はなかなかの雰囲気がある。

城南大学新聞同好会恒例の“怪談酒”だ。

恒例といっても今日はオレと大宮と小里晶子の三人だけ。二年生三人の気楽な飲み会だ。

同好会が部室として借りている部屋はかなりのボロでクーラーをかけてもあまり効かない。

ただ、暑い部屋で酒を呑みながらする怪談というのもそれはそれで乙なものである。

「今の季節にぴったりのタイトルだな」

「稲川淳二みたいに、最後にギャーってな話じゃないでしょうね？」

「違う違う。知り合いの知り合いから聞いたマジの話だって」

「……知り合いの知り合い、なあ」

「スポーツ新聞くらい信憑性がないよね」

オレは大宮のこの手の話には慣れっこだ。

大抵、大宮の持ってくる怪談は大して怖くない。

それどころか、酔って即興で作っているのかヤマもオチも何もないこともある。

「もう、本当に怖い話なんだから！」

そう言っただ宮はひもを引っ張って蛍光灯を消す。

この時間になると流石に部室棟には誰もいないのか、部屋に差し込む光はほとんどない。

窓からのかすかな月明かりの中で、情趣たっぷり大宮は話を始めた。

「……これは、知り合いの知り合いが本当に体験した話なんだけどね」

意外と城南大学の女子は、モテるの。

理由は簡単で、同じ目白に学習院大学があるからね。

普通の男子大学生はそんなことは知らないから「目白の大学だよ」と言えば簡単に騙されちゃう。

お嬢様と勘違いしてくれれば、後はしめたもの。

簡単になびかない深窓の令嬢を気取っていれば、大してデートにも行かずに色々貢いで貰えるらしいの。

国際コミュニケーション教育学科のA子もそれで随分と良い目を見てた。

一年の夏からホスト遊びにハマるような子だけど、お金が尽きないの。

「私、アレが欲しい」

A子がひとことそう言うだけで、彼女の“ファン”が貢物を持ってくるから。

貰うのは似たようなデザインの装飾品ばかりにしておくんだって。

質屋に入れても、一つだけ残しておけばデートの時にバレないからね。

長い黒髪に日本人形みたいな顔で、A子はあまり女にモテたことがない男に人気があったらしい。

中にはストーカー紛いのことをする奴もいたんだけど、別の“ファン”に護衛させて袋叩き。

そんなことをしてもどういうわけかA子には悪い噂ひとつ立たなかつたんだって。

晶子がオレにギュツと寄り添ってくる。

ベリーショートの前髪からシャンプーの良い匂いがする。

オレは晶子の肩に手をまわしてやり、ポンポンと叩いてやった。

まだ付き合い始めて一週間だが、晶子は確かにオレと付き合っていることになっている。

大宮はぬるいビールで喉を湿らすと、ゆっくりと続ける。

ある時、A子は小さな失敗をしちゃったの。

ホスト通いの仲間と高田馬場のミヤマー料理屋で飲んだところを“ファン”の一人に見つかっちゃったのよ。

それはA子が“こたつ野郎”って馬鹿にしてる塾講師でね。

図体がでかくて暑苦しいってくらいの意味だと思っのよ。

運悪く、ちょうど悪口言ってるところを当の“こたつ野郎”に聞かれちゃったんだって。

かなり酷い罵詈雑言で、周りの人が引いちゃうくらいの奴。

この塾講師、A子に随分貢いでたらしくてね。多分、300万くらい？

「どういうことだ！」って詰め寄ったらしいのよ。

そりゃ怒るわよね。私でも怒るんじゃないかな。

でもたまたまA子に助けが入ったの。

ホストね。

同伴出勤するつもりで待ち合わせてたみたい。

「この人、ストーカーなんです！」ってA子がホストに泣きついて、その場は解散。

塾講師はホストが電話で呼んだ怖そうな男たちと黒いワンボックスカーに乗ってどっか行っちゃったんだって……

「わ、私、と、トイレ……」

席を立とうとする晶子の手を捕まえ、オレはそのまま座らせる。

最近同好会に入っただばかりの晶子は知らないかもしれないが、“怪談酒”は途中退席禁止だ。

「もうすぐ良い所じゃないか。ちょっとくらい我慢しろよ」

「で、でも……」

オレは大宮に頷き、続きを促す。

次の日の朝、ゴミ収集車が新大久保駅近くの粗大ごみ置き場で、妙なものを見つけたの。

真夏なのにね、こたつが捨ててあったのよ。

それも、捨て方が変なのよね。

普通に部屋に置いてあるみたいにしてあって、こたつ布団まで掛つてるの。

ちよつと気持ち悪いわよね。

しかも凄い臭いがするの。蠅もいっぱい集つてるし。

でも、ここで時間をかけると次の場所に回れないからって、職員は掛け布団を持ち上げたの。

そしたらね……

中には、バラバラの塾講師が入ってたんだって。

晶子はかわいそうなくらい真っ青になって、小さく震えている。

「……どうしたの、晶子ちゃん。そんなに怖かった？」

「晶子は本当に怖がりだなあ」

「わ、わた、私は……」

腰が抜けたのか怯えた様子で後退る晶子の腕を掴み、オレは無理やり引き寄せる。

「なあ大宮、この話には、まだ続きがあるんだろ？」

「ええ、そうなのよ。この大宮っていう塾講師には妹が一人いてね……」

あなた、『真夏のこたつ』って話、知ってる？

この大学の七不思議の一つなんだけどね。

暑い夏の朝に大学の粗大ゴミ置き場に行くと……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4331v/>

真夏のこたつ

2011年10月8日04時41分発行